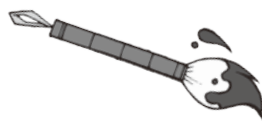


新・下野市風土記

いちろじゅんぶう
一路順風

下野市教育委員会 文化財課

新年度を迎え、進学・就職・転勤・異動など、新たなところに旅立つ方も多くいることと思います。大宝元(701)年に「律令」制度が制定されたことにより、平城宮の中央官庁の官僚や、地方の役所で働く国司などにも、配属替えや転勤がありました。今回は、飛鳥～奈良時代に数多くの転属・異動を経験した、大伴家持についてお話しします。

万葉集の編さんで著名な大伴家持は、天平12(740)年3月に宮内少輔(宮内省次官級)に任用され、3か月後の6月には越中守(富山県知事のような職種)として地方に赴任しました。約10年後の天平勝宝3(751)年には少納言(平城宮太政官官僚)、同6(754)年～9(757)年には兵部少輔(防衛庁事務次官)を務め、この間の755年には難波(大阪の港)で東国の防人を九州に派遣する業務を担当しています。この時に、万葉集に収録されている防人歌の収集も行ったようです。

その後、天平宝字元(757)年に起きた橘奈良麻呂の乱に巻き込まれ、大伴の一族が処罰されます。その影響か、家持は翌年には因幡守として鳥取県へ転出していきます。天平宝字6(762)年には、中央官僚の信部大輔(中務省次官)として復職しますが、翌年、淳仁天皇の下で権勢を振っていた藤原仲麻呂の暗殺計画に加担した嫌疑により、報復人事として同8(764)年正月に薩摩守として鹿児島に左遷されています。この年の9月には、滋賀県周辺で藤原仲麻呂が乱を起し、孝謙天皇の命を受けて軍を率いた坂上田村麻呂(征夷大將軍として蝦夷を討伐した坂上田村麻呂の父)らにより鎮圧されています。家持は九州にいたので、この政変に巻き込まれずに済みました。

神護景雲元(767)年、家持は大宰小式(大宰府の次官)に昇格します。同4(770)年9月に称徳天皇が崩御すると、朝廷の最高機関である左中弁(弁官)兼中務大輔(中務省次官)として平城宮に勤務することとなりました。その後、宮中の式部大輔(式部省次官)・左京太夫・衛門督(宮中護衛の役職)や、上総国(千葉県)・伊勢国(三重県)などの国司を歴任しています。

宝龜11(780)年には参議(天皇が臨席する会議で発言できる役職)に任じられて公卿に列せられ、翌天応元(781)年には従三位まで昇進しますが、翌年に起きた水上川継の乱(反乱未遂事件)への関与が疑われ解任されてしまいます。しかし、3か月後には罪を許され参議に復職、その後中納言に昇進します。

大伴家は、もともと軍事系の武官の家柄でした。延暦3(784)年には、持節征東將軍(鎮守府將軍・征夷大將軍と同格の役職)に任じられて蝦夷征討の責任者となります。

延暦4(785)年8月28日に薨去し、最終官位は中納言従三位兼行春宮大夫陸奥按察使鎮守府將軍でした。亡くなった場所については、陸奥按察使(東北地方の行政監督官)持節征東將軍を兼務していたため、①陸奥国の鎮守府である多賀城(宮城県)で没した、あるいは②遙任の官(現地には代わりの者を赴任させる制度)として在京したので平城京(奈良県)で死去した、との2つの説があります。

家持や菅原道真のように優秀な人材ほど、様々なトラブルに巻き込まれながらも、必要な人材として転属・異動を繰り返し昇進していきます。

家持の父の大伴旅人も官僚だったので、大伴家は二代に渡り転勤族でした。当時、都と地方を行ったり来たりするのはさぞや大変だったことと思います。都で彼らを送り出す人たちは、旅に出る人の安全を祈り「一路順風」の言葉を送ったようです。

また、彼らは「衣錦之栄」の言葉のように、転勤・異動にめげず、立身出世して富貴になり、さらびやかな衣服を着て故郷に帰れるよう努力したことでしょう。